特別
へ13
3539

門へ13
號 3539
卷

昭和三十一年九月二十一日
購求

帝國圖書館藏

序

風来先生戯の筆を
採り多くは小説世に行はれて
より近世閑板の俗文名を
かりて文意を賀或は直ち

風来山人と祀まつり是
皆書林智恵もなく人銭を
欲がり漫(みだり)ゝ　先生の名を
かるゝ言語道断(ふとどき)不届
千万なりまぶしゝ評判





第四篇は孫懋先生の
作みゝ筆勢頗(すこぶる)おれ
ども作れる花の匂(ほひ)おきが
とし其餘紫(むらさき)の朱(しゅ)を棄ひ
蕓(そばさ)の苗をみぐる而(のみ)もあるべ

炭團と名玉と歎き夜
寄と盆三と備るもの共
かゝば今より後堅く制人
可ゝんとゝい先生笑て曰
亦飯を炊ぶて人の聲色を



聞ゝ皆人〻の物好なれ盲
万人目明三人喪るも却て
後世あれば強て咎るも及
ばざるべし真俗みな中道ぬ
頃日書肆清風堂大塙

氏のすゝう。天狗囃機嗇
定縁起を得て樵木り
鏤も是で正真正銘の
風来先生の作なり。善と
悪ひいおゝて市覧



じゝれ。

申霜降月門人　戯蝶謹誌

序

不時ノ吹、我ニ物風と
少し。當ふく打我天物
碎と呼。天物軽母子。天
物祇諸等。氣ヲ付て

陽いより長し此事。予が
拾得(ひろひえ)る所の貴骨(こつ)を。天狗
の舘(たち)鑑(くべ)しと云ひ教へし
を此教ひたる世人。志の
新に風生事を



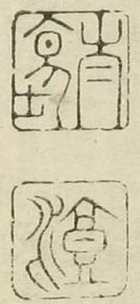
擬(うつ)す事(あまね)く世上に
現れ行く。見むるを
恐ぶる人多し。系も亦
古稀に及ぶ。鈔を
取(とる)事工(くく)に非ず。只持

あるひとは「ひまなれば世を
で。ところ無みゝ紙見を見のゝ。
人は目をくらまさんまえ
あらばこそ
をとよう
山乃上物でもれし

と口すさまれ一度の
笑草とぞ。今
書林はをもをそそり
意しして雪しあを
へぬ。

安永五年丙申十一月日

大塲豐水誌



# 天狗髑髏圖

頭大サ六寸余

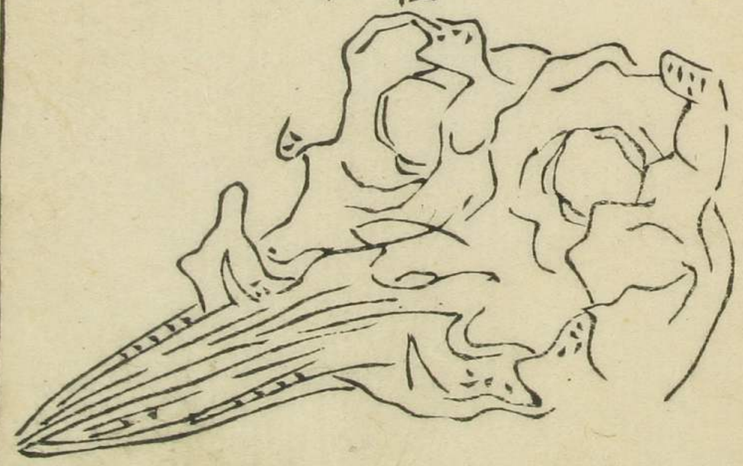
鼻七寸余

目のこゝ成穴一寸五分袤

耳の穴二寸牙五分袤

咽のこゝの穴二ツ

都て一尺二寸余



# 天狗髑髏喚鑒定縁起

明和七ッのとし菓月末乃四日。門人
来りて薬物の出偽を疑ひ。折柄
し扉を叩くこゑハ大場豊水なり。
一乃異物を携へ来りて曰。昨夜五
狗式夢を。今朝夢あて男子あり。
右世留て孫日出ハ

芝の宮宮ゐ所多に。門前桜川と号
する小流れ中ゐ怪しき物あり。拾上
て泥土乃穢を洗ふに。ふしぎの物
ありとて笹、竹間て取出す。多此品
を以て帰るきの道て。人多の皆天
狗の髑髏なりとて市に多せる。国俗
人乃信見説とするに是れ帝ハ先生

蚩伪を無ぜよと。予諾して門人ゐ
告て名其志ないとしむ。一人が曰。これ
大魚の頭骨なり。何蘭陀のかうごろ。其と
為いたならんと。又一人曰。蠻夷ハ大多き
あるも。斯まて大ハ為べからに。これ大魚
乃頭骨ならんと反覆上下の論。異説ま
ちくまして定儀一決せず。予曰。これ天

玉泉西酒

狗のたぐひ。門人驚て曰。吏レ
俗乃天狗と称するものハ金く騎
魅魍魎を指にあれども。定れる形を
ゑがもなければ。我るゑ今世ゑ天狗ゑ画
くに。鼻高ハ。心乃高慢鼻ゑつくるを
を標して大天狗の容とす。又嘴
ハ口を利て差出さぐ木

の義天狗溝飛を狗乃形状ゑ翅
ありて草鞋ゑくハ。飛もしつ歩
行も自由ゑかぐる。松乃梢ゑ位
居すれども。庭傳ゑ出ざぐハ横差者
ゑ羽扇ハ。その入をいとゑ恪書て
雖ども。これ皆画工乃思ひ付なり。実
ゑ山乃ごとき物ゑ有るゑあ所。聖人も

脛力亂神を語らずとしれの玉へい。尚
是ハ天狗ハ弱輩ゝとハ我ゝ浅欺
み名。予曰。諸子ハ疑ふの理れ吉ふ
ら決。去なのゝ微意を悟すんハいさ
ゝか弱ゝ聞さん。古人乃曰。藥を賣
ものハ両眼。某を用ゐ者ハ一眼。某ハ
眼ゝ者ハ無眼とハゝと昔ハ弱。今

時の醫者といふハ。武士の子なれハ惰弱
者。百姓ハ生ハ疎懶者。町人なれハ高慢
者。職人ハ生ハ無用者。糊口
を為ものゝ陽者ゝ。ゝ。ゝ。
ゝを早て。ゝ。醫者とゝ行ゝ毎ゝ
ゝ長羽織。ゝゝと在ゝ中ゝ。某
乃事ハ陳皮ゝ。長袖ゝ嘉路ゝ

踏えさぐるもそこらだらけが醫者
ぐらけ。薬種屋も盲。醫者をわくら。
病家ハ盲目。臭橘を枳殼と
鼠麹草を艾花と。鯨乃牙をう
ホかうるとし。氣蟹を蟹と。翻
白菜を柴胡とゝ湯。廣東人参を
人参と思ふ。其外千變萬化乃大

間違。されとも世ハ盲ふ人をく
らんの茶ハをくらん病ゞ買習ふれ
ハ。是を賣ふの家蔵を建。これを用
るふの四枚屑を象。ものを呑者往
生乃素懐をとげれ。恨をなね
バ気の毒ふとも思ふ。嗚呼哀ー記
う形文盲ふるれ。予これを憂て薬

物は真偽を正し。世上乃醫者の目
玉明らかなる千辛万苦をなすべからず
が心ゆ引出す山をぐるを西沙決多著
ハ水玉樂仁者ハ山を樂。后稷ハ農を
教え。禹王ハ多を治む過ちをな
ほき。是ハ玉補ハ聖人乃ハさを
知る。山の産ハ山は芋。鰻鱺ハ



らで杉果物は。薯蕷ハ芋藷ハ
昔ひ奴等が口は端ハかゝる浮世ハ
産れ来る。牛ハ糞ゆ胡麻味噌や
ら。豆みゝ。ゑちゝ流渡海参は風
ゆ吹ゆ。蟹の竪ゆ横道やぶら
がかゝへとちゝあべこべ。銭ハ有るものハ
利口ハ人を出る杭ハ打るゆ多し。天物

乃ち毎月生徒を論じ。時に移せ
ば股が厚く。日が重れば店賃が高く。月
が延れば質が流る。儒者は本田に毎
月通ふ者なり。堯舜の民なり
志めんと。賢女両夫を見えんと。女
帝屋に二階を濠澤なる高は蟾蜍
が幅狭なりへて。我が仏よりすがめ。

動と止との文字は今みてを。馬めが
合点いるさねば。世話やが生きけ
れども。股へたる菓は人命乃
存えあづれば。少ぬまでを赤目
引きく。某時珍よりかく一回
若せひでなるほど。呑えせば傅え
せで目を欲ばりて。毒小

を明らぐ菜ふも。何れお菓とうも
なりさしが。諸人自身にして天狗
ごつなる燒しがるれば。其波を揚
その鬱を晴して。天狗まするが
卓見なり。そうく縫目乃蚤風さく
悉ハ乃をさんれど。おーて天地の廣
大なる萬物も際限なし。一人の目以



ゆく極がくみれば。若ハ絵ふ畫天
狗殿がお出もを為いものもなれど。
有ふとも天狗ぐくいまさらゆもる
男ぐくなれば。微塵さくをもん人
ともゆく。安イとて小を弱の切さ法
まを不自由ともも思ふねば。只造化と
ゆくる細工人乃おゆ指次并れ。若

又天狗ゝ何者ぞと根問する人乃
ゐられぬ。たまゝ高慢する者。科(とが)なき
者を悪くいふ。人ゝ会ふ抓(つま)
ぐりがゝじる。天狗は軽薄
坊茂怒られ。木乃葉を狗ゝ
とゝ首ゐ切く捨る。豊臣
ゞ見つけて拾(ひろ)ひ上げ狗ゝ。これ

皆余所の事なれ。今時世上ゝ
目がゆけもバ。おとゝふ瓜ゝく
せバ。考ると思ふく考へけるが。
菓子ゝ馬鹿ゝする。謙退(けんたい)
辞議(じぎ)ハ間ゝ合ぐ。高慢ハ損
なしぐる。又天高慢ゝる時。天道
カゝ下ゝ毒を盛く。必憂目ゐ

その形ち。人こゝ情ゆへ。こゝろこゝば。皆
尤とうれつ記ぬ。

天狗さく野ゝ吏でいふと書おかゝ
極く中らが面ゝ書れり

庚寅秋九月　　風来山人書



## 跋

天狗髑髏鑒定縁起といふも。
一ト世ゝ戦ゝ場ちし。大場豊水ふ
與一ゆゑと。此頃書林開板ーしるを。
武人見ゝ小謂ゑ曰。嗚呼子ら人狐
誠るゝ甚ーひる。彼文中鑒ーと
藥店共ゝ言ゝ。陳皮をもゝ

仙のうを。陳皮ハ蜜柑の皮ゆ。

三歳乃小児を能是を知るまして

喝若茶屋をや。古書行きさる前

此文を削去て世の嘲を免る〳〵と。

予答て曰。陳皮のゆ神農本草経

ゆハ橘柚と。後世ニ物自ゆなり。

或ハ方書ニ橘皮と記し。陳皮

者皮のわゝもの。強るを香ゆ

氏ゝ茶撰ゝ遠言をいくゝゝ。

古方家と稱する文盲者も

陳皮ゆ捨ゝ青皮ゆをつゝ。

陰陽造化の理ニ暗く茶を考ル

〳〵療治する。坐行ニて轎夫と

成り。達磨ゝ串童を勤るニ

似たり。蜜柑の皮より腹の皮。日比
笑止千万と思ふ息ゞ鼻人
ぬけ。哉まつ〳〵せち〳〵せ
なり。こけおどゝの大言り
あるを習ひくゞ教て厚ふ
屋し。義を悪たいと無念に
思ゞ。茶屋なもせよ沿者なも



せよ。壺ひ茶ちさく売て陳
皮一味のみるりとも。とふふと
いふ人をなゝ。来りゝ系と議
論せよ。所ハ神田大和町の代地。
一月三分の貸店。貧乏
暮せしも名も隠れ
時平安永五ツの小ゝ。屁

紫赤いちや申ハ極月。借金乞ハ
いひ訣の暇風来山人識

實
實



風来先生著述書目

當世野夫論　近刻

虚實山師辨　同

清風堂